パネルディスカッション

総合司会　吉野　篤（日本大学法学部教授）
挨　拶　岡島　芳伸（日本大学法学部次長）
挨　拶　秋山　和宏（日本大学法学部政経研究所長）
司　会　秋山　和宏（日本大学法学部政経研究所長）
パネリスト
大島九州男　氏（参議院議員：日本大学法学部卒業）
小野　晋也　氏（元衆議院議員：橿樹舎舎主）
白　眞勲　氏（参議院議員：日本大学生産工学部卒業）
福島みずほ　氏（社民党党首）
福田　充（日本大学法学部教授）
吉野　篤（日本大学法学部教授）

※肩書はシンポジウム開催当時のもの

（吉　野）　ただいまから、平成二四年度、日本大学法学部・政経研究所・共同研究シンポジウム「今、政治家を問う」というテーマで開会をさせていただきたいと思います。

本日は、お寒いなかご来場いただきまして大変ありがとうございます。

まず、開会に先立ちまして、法学部の次長でいらっしゃいます岡島先生よりご挨拶を頂戴したいというふうに思います。先生、よろしくお願いいたします。

（岡　島）　法学部次長の岡島でございます。本来ならば学部長の杉本がご挨拶するところでございますけれども、所用がございまして、失礼させていただきます。

実は私、法学部でございますけども、法律系でご

ざいまして、政治に関しましては一般市民並の関心といいますか、それでも選挙権は必ず行使して、二〇年間棄権したことはないという程度の選挙といいますか、政治に関する関心はございますけれども、それ以上深く勉強したということではございません。

きょうのテーマが「今、政治家を問う」ということで、きわめてタイムリーな話題だろうと思います。非常に皆さん方も関心を持って聞かれ――ちょっと天候がよくなかったのと、連絡が遅かったので、もっとたくさんの一般学生にも聞いてもらいたいところではありますけれども、それでもこれだけの皆さんがお集まりいただいたということについてありがたいと思っていますし、ゲストといいますか、参加の先生方にも深くお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。（拍手）

（吉野）　ありがとうございました。

それでは続きまして、政経研究所の所長でいらっしゃいます秋山先生からご挨拶を頂戴したいと思います。よろしくお願いいたします。

（秋山）　シンポジウム開催にあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

われわれ政経研究所では、三年ぐらい前から「政治家研究」ということで、所員による共同研究をしてまいりました。今回このシンポジウムは、そういった共同研究の一連の流れに沿っているものであります。研究も三年経ちましたのでここらで一区切り――やめるわけではありませんが――をつけようということで、この度こういうかたちでシンポジウムを開催することになりました。

皆様、お感じのように、どうも政治に対する信頼がいろいろな面で地に落ちてしまったようで、そのことは今回の衆議院選挙の投票率を見れば一目瞭然です。低投票率はまた政治に対する失望感の表れだろうと思います。われわれは、確かにこうした現象は制度の問題であるけれども、しかし制度を動かすのは人なのだという観点から政治家に早くから注目をしまして、ここに研究の焦点をあててやってきたわけであります。

この度、開催に際して、五名の政治家の方々ご出席いただきました。非常にありがたいことと思っております。とりわけ基調講演をいただきます河野洋平先生、自由民主党の総裁、そして国権の最高機関

の長たる衆議員議長を歴任された非常に偉大な政治家だと思いますが、その先生にお越しいただいたということは、非常に光栄の至りと思っております。

私事でいいますと、河野先生については、自民党にいられて、そしてそこを脱党しまして新自由クラブを立ち上げた、お若いあの頃のお姿、あの頃のキリリッとした表情というのは、未だに強く脳裏に残っております。今日、先生にお目にかかれて、感激を新たにした次第ですけれども、その先生に基調講演をいただくというのは本当にありがたいことと、重ねて感謝申し上げる次第です。

合わせて、のちほど討論に参加いただく先生方にも、それぞれ、暮れのいろいろご予定があるなかをわざわざここに駆けつけていただきましたことを心からお礼申し上げます。これらの先生方とは、あとで少し密にディスカッションをさせていただければと思っている次第でございます。

是非、今回のこの機会を、一つの勉強の機会と捉えて、そして実りの多い成果を得られればと思っておりますので、会場の皆様共々よろしくお願いをしたいと思います。

（吉野）　秋山先生、どうもありがとうございました。

（秋山）　それではこれから「今、政治家を問う」というタイトルで、平成二四年度日本大学法学部の政経研究所共同研究シンポジウムを開催いたします。

きょうは、いろいろ生憎が重なりまして、年末の慌ただしい折りに、しかも連休の初日に当たり、おまけに雨にまで降られてしまいました。こうした悪条件にもかかわらずお越しいただいた先生方、本当に今日はありがとうございました。われわれの申し出に快くお受けいただきましたことを、非常に感謝いたしております。

それから最初に申し上げますが、この並び順はあいうえお順でございますので、私のあから始まりまして、向こうのこちらの教員お二人、全てあいうえお順でございますので、ご了承ください。ちょうどうまく並びましたものですから。

それからもう一つ、私はふだんあまり議員の方、政治家の方を「先生」とは呼ばないのですけれども、しかし、尊敬する分には人後に落ちないつもりでおります。ただ、何とお呼びしていいかというのは、

ちょっと私のほうも見当つきませんので、今回に限り「先生」と呼ばせていただきます。それもご了承いただきたいと思います。

〔出席者　あいうえお順にご紹介〕

先程、河野先生から非常に貴重なお話をいただきまして、実は、あのお話のなかで、今回、われわれが考えた趣旨と非常に合致するところがありました。そこで初めにあたりまして、今回の主旨を述べさせていただきたいと思います。

先程もちょっとふれましたように、三年程前から研究所でもって政治家研究ということを始めました。これは実は理由がございまして、一つは、先程、私の挨拶のなかで述べさせていただきましたけれども、近年政治家の質が非常に問題視されて、ますますそれが声高に叫ばれるようになった。そこで政治家というものを少し真面目に、こちら研究するサイドとしても検討する必要があるだろうという思いが非常に強くなった。これが一つの動機です。

それからもう一つは、これは政治学に関係することですけれども、実は、われわれ専攻しております政治学の領域では、ともすると、これも先程、河野先生おっしゃっていましたが、政治についての哲学や思想や理想がどうであるかが重視され、あるいは制度についても、主にもっぱら制度論というふうな形で論じられることが多くて、あまり学者が実態研究を手がけるということをよしとしないような風潮がありました。そんななかで、政治家論というのがないわけではありませんでしたが、あっても大体、偉大な政治家についての伝記や業績の記述といったもので、政治家が政治においてどういう役割や行動を演じたかといった、そういう実態的なあるいはマクロな視点からの研究がほとんどなしにきた状態です。そこでなんとかそういうところに少しでも風穴を開けられればという思いで政治家に着目をしたということがその発端でございます。

これもまた河野先生のお話とダブルかと思いますが、どうしても制度に目がいくわけですね。何か政治が悪くなると制度が悪いと。いまの選挙制度についても、八〇年代末にいろいろな政治スキャンダルが起きたところから、政治が悪い、政治改革が必要だということが声高に叫ばれた。次いでどこに行き着いていったかというと、選挙「制度」が悪いんだ

という議論になり、中選挙制の選挙制度を変えるべきだとの大合唱になりました。そして九四年でしょうか、いまの選挙制度に変わったわけです。新選挙制度の下、一九九六年の衆院選からいまの小選挙区・比例代表並立制で選挙が行われるようになりました。

以来、つい先頃の選挙まで何度も選挙を繰り返してきましたが、政治が良くなるどころか、ますます混迷に陥っていくようにも見える。果して制度のせいだけにしていいのかとの疑問が湧いてきました。制度を運営するのは人間である。とりわけそれは政治家に期待されることである。もう少し政治家の実態というものを解明すべきではないかという発想そこらあたりからきたものであります。以上諸々並べましたこちら側の主旨を是非おくみ取りいただいて、忌憚のないご意見をいただければとお願いする次第です。

そこで、まずそれぞれ先生方、なぜ政治家を目指されたのか、それから政治家としてのご経歴等を踏まえて、自己紹介願えればと思います。大島先生のほうから順番でお願いいたします。

（大　島）皆さん、こんにちは。私は日本大学法学部政治経済学科出身でございまして、皆さんと同じ同窓でございます。

きょうは本当に、このお忙しいなか、また連休の初日にたくさんの心ある学生の皆さんの前でお話をさせていただきますこと、心から感謝を申し上げます。

プロフィールは学生さんが調べて書いて下さったので、もう割愛をいたしますが、私は福岡県は直方市という田舎に生まれて、大学を卒業して田舎に戻りましてね。地域が発展しないのは人材がいないからです。それは何か。地域をつくるのも人でありますから、そういう意味で人材を育てるということで学習塾を始めたんです。学習塾を始めて、地域で子ども達と一緒に勉強している途中、二九歳の時に、地域の皆さんに推挙されて市会議員になったんです。それまで選挙とかあまり行ったことない。まさしく政治に興味がなかった。にもかかわらずそういうご縁をいただいて、三期一二年務めて、そしてこのまんま四期、五期やっていれば、まあ、議長ぐらいにはなれるなと、そういった気持ちはあったんですが、

このまま安穏としてていいのかと。自分が政治家としてのどれぐらいの実力があるのかも井の中の蛙でわからないから、たまたま民主党の公募があったので、その公募に、まちの「のど自慢」に出るつもりで出たら、ある程度のところまで残りました。ですが、最終的に参議院の公募に落ちて、その時の約束が民主党に入る、その人を応援するという約束でしたので、そのまま、党の活動を続けていたら、麻生太郎さんと衆議院選挙をやるか、地元の市長選挙を戦うか、この二つを迫られ、厳しい道はどっちかといえば麻生さんと戦うということなので、そこにいかしていただきました。そしたら、二回負けて、普通そこで終わるんですけども、はからいをいただいて、いま全国の参議院議員として仕事をさせていただいているということです。

だから、結論からいうと、自分が望んだというよりは、そういう要請を受けて、そして自分がふれてみた時に、ああ、この政治というのはこうであるべきだということがあって、その道をしっかりと極めさせていただかなければならない、それが私の使命だというふうに感じて、いまここにいるということでございます。簡潔にご説明させていただきました。

以上です。

（小　野）　先日、秋山先生からお話がありまして、政経塾の学生達と話をさせていただきました。皆さん方が思いを持ちながら、この混迷の時代のなかに、若い世代としての道を開こうとしている、その意欲に心から感動を覚えるものがございました。

先程、大島先生から、また秋山先生からも政治は人なりという視点のお話がございましたが、私もそうだと考えております。マニフェストの必要性が指摘をされまして、前回、前々回の選挙等ではマニフェスト選挙ともいわれたわけでありますが、やはりいくら細かくものごとを決めておきましても、最後はその環境も変わっていくわけですし、また、その人の思いというものもある。また、その時のその政治状況というものもあるわけでありますから、最後は政治家が決断をして、世の中を動かしていかなければいけないわけですね。

そのためには、政治家自身に力がなくてはならない、これは私の基本的な思いでございます。私もこれまでにいろいろなことをやってきましたけれども、

その主旨でいうならば、私が皆さんに語るべきこととして、自由民主党のなかに「中央政治大学院」というのがあります。これは、昭和三〇年代の初め頃、自由民主党が政権党としてやっていくためには人材育成をきちんとやらねばならないということで、岸総理の時代だと思いますけれど、設立されたものなんですよ。そこで、最後の任期の時には、学院長という役職をやらせていただきました。政治家になるということのために必要な基本的な資質というのは一体どういうことなんだろうか、人間的な考え方や視野というものをどう持たねばならないんだろうか、こんなことを皆さんにその立場から問いかけさせていただいたというのが、今日、ここで皆さんにお話しする足場になるものなんだろうという気持ちがいたします。

なお、この経歴紹介によりますと「衆議院解散に伴い政界引退」と書いていますけれど、政界というならそうかもしれませんが、政治家を辞めたつもりはないんですね。つまり、バッジをつけている人は、確かに国民の代表としてのポストを持っての仕事をされるわけですけれども、同時に、バッジをつけていない立場からも政治という問題を考えるべき時代がいま始まってきているのではないかという意識が私のなかにありまして、「在野の政治」ということを語りながら、いま四国を足場にしながら、様々な活動を展開しています。

その活動のなかで、これからどういう日本の国をつくっていけばいいのか。さらにはこれからはもう世界が一体になる時代に近づいていきますから、人類社会がどういう人類社会に向かっていかねばならないのかと、こんなことも研究したりそれを発表させていただいたりしている日々です。とりあえず、自己紹介としてはこんな紹介とさせていただきます。

（秋山）どうも先生ありがとうございます。

私もちょっと頭かたくて、最初とお会いした時に、政治家を引退といいかけて、ちょっと失礼したんですが、まさに国会議員を自らの意志で出馬を取り止めて、そしていまは地元愛媛県に戻られ、立派な塾を開かれて、後身の指導に当たっておられます。そしてお手元にも入っていると思いますが『月刊ＯＡＫ・ＴＲＥＥ』という印刷物も発行されている。ズーッと毎月出されて大変だろうと思うのですが、

そういう先生でございます。

（白）　皆さん、こんにちは。参議院議員の白眞勲（はくしんくん）と申します。きょうはこういう機会を与えていただいて本当にありがとうございます。

私も大島九州男先生と一緒に、日本大学の出身でございまして、といっても法学部ではなくて大学院の生産工学研究科というところで建築を勉強させていただいて、大変、優秀な成績で卒業いたしまして……（笑声）そのあと、建築とはまったく違う分野の新聞社に入って、韓国の新聞社なんですけど、朝鮮日報というところに入って、そのあと政治家になったわけでございます。

ウィキペディアのなかから抜粋していただいた私のプロフィールが書いてあるんですけど、「菅直人に抜擢され」と書いてあるんだけど、菅直人さんに会ったのは、私は選挙が終わって当選したあとからしか会っていませんから、これ、嘘なんですけどね。

ウィキペディアってけっこう嘘書いてありますから、気をつけてください。アレ？　と思うようなところがありますけれども。

それはそうと、私の場合は、この名前からしてもちょっと日本名じゃないよねというのをおわかりいただけるかと思うんです。私は父親が韓国人で母親は日本人です。当時、私が生まれた一九五八年（昭和三三年）というのは、まだまだお父さんの国籍によって、その子どもの国籍が決まる時代でしたから私は韓国人としてこの国で生まれ育ちました。

いまここにいらっしゃる若い方は、あまりわからないと思いますが、想像を絶する様々な経験を私もいたしました。いわゆる差別というので。ここで私、別に人生暗かったというつもりはないんですけれども、そういうなかで、新聞社に入ったというのもそういうところで、やっぱり韓国とも相互理解していかなければいけないよねというのが私の、お互い人間同士なんだから、なんでそんなに国籍だということで差別しなきゃいけないのというのが、私の子どもの時からの基本的な考え方でもあったんですね。

そういうなかで、朝鮮日報の日本支社長になってから、ちょうどインターネットが流行り始めたので――朝鮮日報って韓国の新聞なんですよ。ハングル語だから日本人誰も読めないんで、丸書いて棒書いてというハングル文字だから、何だこれという話に

なっちゃうんで、それを日本語に翻訳してインターネットに出したりして、いわゆる相互理解というのは重要なんじゃないかということから仕事をしていましたところ、なんかテレビに出てくれといわれて、様々テレビに出て、『サンデージャポン』とか、皆さん、よくご存じかもしれませんが、そういったところにも出ていたりしてて。そしたら、参議院選挙出てみませんかと。

その前に日本人になったんですね。なんで日本人になったかというと、ちょうど四〇の時に、私、決心しましてね。人生八〇年として、半分、人生四〇年を韓国人で過ごしてきたから、残りの人生は、よくハーフというじゃないですか、こういう人間を。ハーフじゃないダブルなんだよねということで、だったら次、日本人として生きてみたらどんな体験ができるんだろうということで国籍を日本にかえてみたということなんですね。別に、なんかいろいろなことを書き込みには、こいつは政治家になるためになんとかだとかんとかだとか、朝鮮の陰謀だとか書いてあるんだけど、そんなことぜんぜん関係ない。そんなことよりも、そういうことではなくて、人生八〇年のうちの四〇年で、四〇年後、日本人で過ごそうと思って日本人になったというなかで、テレビに出たりなんかしていたら民主党からお声がかかって、政治やってみませんかといわれて、それは一つのアイデアだなと。なぜならば、新聞社でやってみて、ちょうど二〇〇二年の頃というのはワールドカップ、日韓共催があったりして、非常に韓国との理解というのは進んだんですが、どうしてもやっぱり政治が壁になっているなあというのは感じていたんですね。これをというところで、あんたやってみないかといわれたら、ちょうど、朝鮮日報の日本支社長やって一〇年だったし、人生、一つの区切りは一〇年だなと思っていたんで、じゃやってみましょうということでトライして、当選させていただいたということでございます。

二期目を今やらさせていただいて、野党で始めて与党になって、また野党に戻っていく状況のなかで、様々な経験をいまさせていただいているという中で、今日こうやって皆様から、いろいろなまた意見も聞きたいなとも思っておりますので、是非よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

（福　島）　どうも皆さんこんにちは。社民党の福島みずほです。

私自身は、弁護士をしていて、いまも弁護士なんですが、実際、裁判に行くのはきわめて限られた、冤罪の事件とか、いままでやっていた延長で裁判所に行くことはありますが、いまは政治のほうに専念という形です。

一九九八年に立候補して議員になりました。いま参議院の三期目なんですが、なぜ議員になったかというと、一つは、私自身は、弁護士の時に選択的夫婦別姓と、両親が結婚届けを出してない子どもの相続分差別の裁判、通称使用の裁判などもやっている弁護士で、民法を変えようということで、それがまだ実現してなくて本当に時間がかかっているんですが、議員立法というよりも市民立法という形で法律をつくろうという活動をしていて、国会のロビー活動などを非常に活発にやっていたんですね、集会をやったり。

そのこともこれありだと思うんですが、当時、一九九八年、社民党の党首であった土井たか子さんから、これからさみだれのように有事立法が出てくると。そんな国会で一緒に頑張ってほしいといわれたんですね。私自身は、人生設計は、弁護士になろうと思って法学部にいって司法試験を受けてという人生を送ってきましたが、政治家というか、議員になるという自分の人生設計はしたことがなかったんですね。ですから突然そういわれても、うーん、やっぱり向いてないんじゃないかとか、私は気が弱いので政治家に向きませんといったら黙っていらっしゃいましたけど。（笑声）

唐突というか、そういうこと、私の人生でちょっと考えてなかったということだったんですが、最終的に決意をしたのは、さっきの河野先生の話ではありませんが、やっぱり憲法九条を変えるべきではないし、有事立法がさみだれのように出てくる国会で、頑張ろうと。楽しく市民運動をやったり弁護士をやるのが自分の天命だというか、天職だと思っていたけれど、国会という舞台で、気がついてみたら有事立法がたくさん出てきたり、憲法まで変えられるとなれば、私自身の基本的人権も、市民社会もすごく息苦しくなるだろうと。そしてチャンスがあるんだったら、じゃやっぱり政治の場面で頑張るべしと、

こう思って、周りはむしろやったほうがいいという意見だったんですよね。ですから、なんか世論で立候補したというよりは、ものすごく躊躇の末、考えて、悩んで立候補したと。でも、ひどいことが人生に起きるんじゃないかということまで考えて議員に立候補したので、何でも耐えられるといったら変なんですが、与えられたなかであらゆるもののチャンスを使って、やっぱり社会をよくするために頑張ろうというふうに思っているところです。それが自己紹介です。ありがとうございます。

（秋山）どうもありがとうございます。

私自身の主旨からして、あまり、一分でお答えくださいとか三分でというふうに時間を区切るのは嫌いなものですから先生方ご自由に思いますが、ただ、全体の枠組がありますので、簡潔にとだけお願いしておきたいと思います。

それからちょっと本題に入る前に、もう一つ、多少、傷口に塩を塗るようなご質問で恐縮かと思いますが、今回の選挙結果をどういうふうにご覧になっているのか、それぞれの先生方からご感想をいただければと思っているんですが。

（大島）今回は、私も党のなかで話させていただいたんですけど、小選挙区制になって民主党ができる時、社会党だとか社民党の先生達は、このままバラバラで自民党と戦ってはダメだと。だから団結して一つの党で戦おうというふうにして、みんながいろんなものを超えて、一つになって小選挙区に臨んだんですよ。

今回は、政権を取って、本来、二大政党になろうとしたら、その民主党ができた時のその思いというものを、本来ならばしっかり大事にして小選挙区制の二大政党で戦うその制度に合ったその思いでいかなければいけないのに、その政権を取ったら、ヤアヤアヤアと、俺は選挙に強いから、いまここで解散しても大丈夫だと。それでまあまあ、なんかいろいろいうことを聞かなくてなんか勝手に吠えているやつなんかは落ちてもいいと。それで純血路線で贅肉を切って、それで俺らはまたこの党で頑張るんだというような思いで、仮に解散を決めてしまうなら、このような結果になるだろうというふうに思っていました。民主党ができたその時の経緯をしっかり踏まえながら、そして例えば、これが二大政党制を維

持するためにこのタイミングで解散するべきがいいことなのかどうかというようなことだったら、もうちょっと負けてないんじゃないかと思います。それはなぜかというと、その思いによって解散する手法や時期が、大きく変わるからなんです。だが、あのタイミングで、あのような形で解散をするということは、一部の人間が、党だとか国のことを考えるよりも、もうちょっと低いレベルで物事を考えて行動した結果というふうに、私はそのように理解しています。

以上です。

（小野）　端的にお話し申し上げますと、今回、私は野（や）の立場から選挙を見せていただいたわけでありますが、国民の皆さんのこの覚めた感覚、これがすごく強かったと思います。政治というのは政（まつりごと）といわれるように、何か心に燃え上がってくるものを伴ってその国の代表を決めるような活動であるだろうと思うんですけれども、みんなはどこへ票を入れていいかがわからないから、一つ一つ消去法で消していくと、結果的に見ると自民党が組織を持っているだけに強かったと、こういう結果だと見ていいんじゃなかろうかと思うんですね。

ですから、この選挙を通して透けて見えてきたのは、国民の皆さんの政治離れの意識です。これが私はいちばん危機的であって、永田町のなかで民主党が優位に立とうが、自民党が優位に立とうが、これはさほど基本的なところの大きな問題ではないと思うんですね。国民全体の意識が政治を離れつつあるということに対して、どういう答えを出せるか、これが大きく問われた選挙だと思っております。

（白）　民主党の仲間からも話がありまして、われわれ、本当に反省をしていかなければいけないだろうというふうに思っております。

今回の選挙は、自民党は結果的には勝っていますが、数字的に見たらば民主党のほうが大負けした選挙であるというふうに私は思っております。

じゃ、その原因は何なんだといえば、約束したことをちゃんとやってなかったんじゃないのかという、この一点に尽きるんではないか。約束してないことをやっちゃったりした。だからそこの部分、その部分をどういうふうに判断をするのか。それから約束したことをきちっと伝えてないということ。これも

反省の一点だと思います。

要は、メディアに対して、私はメディアの片隅にいた人間として、やはりメディアに対しての――メディアというのはどうしても牙むいてきますよ、与党に対しては。与党に対して牙むいてくるというのは、自民党の人達というのは慣れているんだよね。われわれは、いままで一緒に野党で牙を向けていたほうだったんですね。向かれたほうになっちゃった途端、なんだこいつらという感じになっちゃって、ますますメディアとの関係が険悪になってきたんではないだろうかという部分が私はあって、それが今度、今まさに水に落ちた犬の状態になったら、メディアはコテンパンにわれわれ民主党をますますやっつけているというのが、なんかそれみたことかみたいな部分になっちゃっていて、非常に感情論になっているんじゃないのかなと、私はすごくそういう部分があって、これを回復させるためには、相当なきちっとした対応をこれからしていかなければいけないなと思います。

もう、簡単にいえば、われわれがいくらマイクで駅前で喋ったりビラを配ったり有権者に個々に話をしても、マスコミで、ある評論家から「嘘つき、民主党」といわれたら、それで全部パーッと飛んでいっちゃう。そういう部分で、私は、メディアにいろいろ思いがあります。僕はメディアのことを悪口いうつもりはない。メディアというのはそういうものだと思っている。そういうものに対して、きちっと対応できなかったわれわれが反省をしなければいけない。そういう対応に対して、どうわれわれは今後対応していくか、あるいは構築していくかということをきちっとしていかないと、俺達、いいことやっているんだ、わかっているだろうといういい方じゃもうダメなんだということ、そこをきちっと対応していかなければいけないなと私は思っております。

（福　島）　今度の衆議院選挙は、本当に社民党に取っては厳しい結果で、いままで党首としても個人としても、いろんな選挙を経験していますが、いままでにない厳しい結果でした。ですから、来年、参議院選挙が七月に待ったなしであるんですが、本当にどうやって再建をしていくのかと同時に、参議院選挙は待ったなしのところで、両方やっていかなければならな

いと思っています。

社民党としてどうかというのはあるんですが、ちょっとやっぱり、今回の選挙を見ていると、一つは、脱原発や憲法や格差、消費税などもきわめて重要なテーマであったと思うし、その声も現実にすごく受け止めたんですが、それが選挙の非常に重要な争点というか、脱原発の人が多いから、じゃ原発を推進してきた自民党には入れないという形の選択にはならなかったということについて、やっぱりそれがどうしてなのか、そこに声が届き切らなかったのか、そういうことも含めて本当に考えなくちゃいけないと思っています。

もう一つ、選挙制度でいうと、小選挙区制度の弊害というのは、この間、とても出ていると思っていて、前回の選挙は、自民党への罰ゲーム、今回の選挙は民主党への罰ゲーム、ということみたいです。前回、民主党に入れてがっかりと思う人は、選挙に行かないか白票を入れるか維新かみんなのほうにいっているわけですよ。それが社民にこないというところがまた社民党のこれまた問題点なんですが、でも、結局、自民党か民主かでオセロゲームを、今回は真っ白、今回は真っ黒、今回も白眞勲さんがおっしゃったように、自民党が比例票ではむしろ減らして、全体の一六％しか得票がないんだけれど、議席数では圧倒的に勝利をしてしまいました。私自身は、だから比例票重視の選挙制度、それは参議院でやるのか比例でも加味するのか、そうしないと毎回何百人かが新人でやってきては、何百人かが国会から去るという、ものすごくブレの大きい政治をやることが本当にいいのか、政党の中にいろんな人がいていいんだけど、やっぱり政党政治的などういう哲学、どういう政策で戦うのかという、いまだから政党が離合集散、どっちにいったら得か損か、みたいな、どこにいま身を寄せればそこでは通るみたいなになっているのも、政治の劣化と政党の劣化と国会議員の劣化を生んでいると思っていて、それはでも全部天唾（てんつば）で、自分達にはね返ってくる話なんですが、きちっと、むしろいろんな人ともっともっと話をしながら立て直しもやっていきたいと。選挙制度についても運動もやっていきたいというふうに思っています。

（小　野）　ちょっとコメントよろしいですか、いまの点。

福島先生、せっかくこういうシンポジウムですから、いろいろ意見交換をしながら進めていくのはいいと思うんですが、先程、先生、反原発の問題が、ほかの問題も含めてありましたけど、特に私の場合は、反原発の問題についておっしゃったことに対して、ちょっと異論があるんですね。

これだけ福島の問題が起こっていて、それでその原発は否定されているはずなのに、それが争点にならないという主旨でいまお話しされましたけれども、この問題というのは、私は放射性物質を閉じ込めることが可能なのか否かが実はいちばん大事な問題であって、原発そのものがいい悪いの問題ではないと思うんですね。確かに、今回、福島の地震・津波に伴って被害を受けた方々に対しては、国策としてやってきたことに対して、私どもも反省すべきところはあるだろうと思います。しかしこれはやはり、エネルギー政策という国家にとって非常に大事なものについて、一定の指針を持って取り組んだ結果であって、反省すべきところはもちろんあるんですけれども、その議論をやる上には、もっときちんとした議論を経た上で結論を出さないといけないので

（福　島）　根本的な議論をしなければならないというのはその通りですが、一年八ヵ月経って、じゃ議論は深化したんでしょうか。論点に入ってすいませんが、きょう、安倍総裁自身が、原発の新設もあり得るといっているわけですよね。ですから、結局、私はそれはやっぱり原発推進だというふうに思っているんです。ですからそれは、私は大いに議論することは必要だと思いますが、一年八ヵ月たって、この間、ものすごく議論して、ほぼ毎日議論してきたという原発の問題点も、ようやく活断層の問題なども、全国でも規制委員会も含めて問題になっているので、小野先生おっしゃる通り、エネルギー政策について議論しましょうというのはその通りだが、福島原発事故があって初めて行われる衆議院選挙で、原発の是非は、私はある意味争点になったとは思っているんですが、もっともっとこちらもうまく問題提起を

したかったというふうには思っております。

（秋山）　ちょっとどうでしょうか、これは本日の主たる議論ではないので、小野先生、よろしければちょっとここで……

（小野）　この論点は、実は国会のなかで、なぜきちんとした議論が行われないか、それを国民の皆さんがご覧になって、それぞれ勝手に自分の言いたいことをただ言いっ放しで言っているだけであって、そこから建設的に何か国の未来を開く新しい絵が描かれていないのはなぜなんだと。これは政治家の問題なのか、制度の問題なのか、むしろ国民世論がそういう問題を引き起こしているのか、こういう基本的な非常に大事な問題を提起されている部分だろうという気がするんですね。

ですから、そんな意味でいま申し上げたわけです。

（大島）　一言。きょうの権力と政治家の関係や政治家の資質として問われる問題の一つのいい例ですから、皆さんに是非考えていただきたいのは、なぜ、原発を推進しているかですよ。その原点をよく見たらよくわかるじゃないですか。原価を決める時には、建設費を全部足して、高けりゃ高いほど総括原価方式で高いお金がもらえる、料金取れると。そしてその周辺には、原発立地補助金でぼんぼんカネをばらまくことができる。一つ、いい方は悪いですが、麻薬と一緒で、いったんもらったら、その地域にはまた二つ目、三つ目というふうにどんどん、どんどんできてきたというその現実を見た、そこから皆さん感じ取ることが一つ。

それとわれわれは、唯一、原爆で被爆をした国の国民が、また今度は原子力爆弾じゃないけども、原子力という人間の英知でコントロールできないもので、二度も国民がそういう被害を受けたということに対して、政治家ならどう考えるかなんです。

だからそういった政治家の資質に問われるいちばん大きな問題点はありますよ。是非、今日はそういったところを皆さんにも一緒に考えていただいて、皆さんの意見をいただきたいと私はそう思いました、いまの議論を聞いていて。

（福島）　国会事故調というのをつくって、初めて日本で国会のなかに事故調という独立した機関をつくって、けっこういい報告書を出したんですね。ただ、その提言が、国会のなかに原発についての委員会をつ

くってきちっとやれというのを、なかなか、それは抵抗する人達がいて、委員会がつくれないあるいは国会事故調のメンバーを国会に呼ぼうとしてもなかなか話ができないというのもあるので、ですから小野先生おっしゃる通りなんですが、現実に、じゃ国会でやればいいと思うんですよ、そういう議論も含めて。でも、それを阻んでいる、ちょっとステレオタイプかもしれませんが、いま大島さんおっしゃった既得権益だとかそれがやはりものすごく、もちろん私達はそれを突破しなくちゃいけないんだけれども、そうなってないというのもあるんですよね。それがこの権力と政治家との関係というところにあるのかなというふうには思います。

（白　）　小野さんおっしゃる通りで、放射能どう封じ込めるかがいちばんポイントなんで、その通りで。ただ原発って放射能出すわけで、これどうするんだという話になって、国民はこりごりしているんだと僕は思うんですね、今回の放射能について。もう嫌だ、そこから原発はやだという声になっていくわけですから。そのあたりと、いま大島先生おっしゃったように、一体、なんでこんなにいっぱいこの国で原発あるのという部分の、もう一回議論をきちんとし直しましょうねと。それと同時に、やっぱりエネルギー政策どうしていくんだということ、これをやっていくことがまさに政治だなというふうに思っています。以上です。

（秋　山）　ちょっと先に進めさせていただきたいと思います。

ここまでは、実は前段・前座といいますか、これから本題なんです。われわれ研究者のほうからの切り口なんですが、こんなことを用意したんです。

一つは、そもそも政治家って何なのかということになるといろいろ議論があるでしょうが、政治家というは、やはり権力と何らかの関わりを持つ、そういう立場であるといえるかと思います。とすると、それぞれの政治家の方々がどうやって権力との距離感を保っていられるのか。そのあたりのご経験なりをお伺いしたいということが一つです。

それから二番目としましては、われわれの周囲にはいろいろな政治体制がありますが、とりわけ代議制という体制のもとにおける政治家像といったような、そういう限定した形で考えなければいけないのだろうと思うので、そのあたりをどのようなお考え

をお持ちかという点。

もう一つは、危機管理というのは、いまちょうどお話も出てきましたが、原発だけじゃない、地震を含めて、われわれの周囲には顕在的・潜在的な多くの危機がある。危機管理に政治家はどう対処すべきかと。ちょうど危機管理の先生がいらっしゃるものですから、こういう切り口で設定しましたので、ご協力願えればと思います。

まずいま最初に申し上げました点について、それぞれ先生方、政治家って何だろうとお考えなのか、そのへんから少し明らかにしていただきたいと思います。

（大　島）　基本的に、政治家というのは、何か、偉い人とか力持っている人とかいうふうに考えるその根底は何かというと、皆さんの一票をいただいて、皆さんの代わりに政治を代議制でやっているわけですよ。だから、俺が政治家だと、選挙の時は頭下げて、バッジつけるとこうなる（胸をそらして）人いるでしょう。これがいちばんの大きな間違いで、基本的には皆さんの声を代弁するというのが代議士なんです。じゃどういう声を代弁するのかというのは、皆さんの意見をお聞きし、それを集約して、私はこういう政治をするということに対して、皆さんから票をいただき、一票一心というその心をいただいて出て行くというものであると、これが僕の基本的な考え方。

私の例をいいますと、私が教科書バリアフリー法という法律に携わった時に、僕達は、弱視の子ども達にあまねく拡大教科書を届けるためには、検定に受かったら教科書会社に拡大教科書をつくることを義務づけた、そういう法律にした。そしたら自民党さんが、教科書会社からいわれて、努力規定にしてくださいと。そうしたら衆議院で協力しますからと通しました。そしたら子ども達からこういう手紙がきました。法律はできたけど、ぜんぜん進まないじゃないかと。まさにそういうことですよ。つくりたくない心で、われわれの義務を努力規定に自民党さんからかえられた、これは事実です。

で、政権交代しました。そしてそこで副大臣に私が質問して、こういう状況ですよといったら、副大臣が一言「由々しき問題です。業者は厳しく指導します」といって、いま九八％できました。だから権力というのはそういうふうに正しく使うものなんで

す。だからそういう利権だとか自分達の思いで使うものではないんだということなんですよ。こういうことを明快にした政治家だったら、たぶん皆さんは、幸せな政治家が送れるような政治が生まれるんですよ。

ところが、業者だとかその一部の人達の声を代弁して、そこの利益につながるような形で権力を行使するようなことがあるから、ああいう原発事故が起こったりするんだと、そういうことなので、権力は本当に心ある政治家がしっかりとした倫理観やそういうものを政治家が使うべきものであって、そういう心のない人の使うものではないというのが私の考え方です。

以上です。

（秋山）　小野先生、一家言おありかと思いますが、どうぞ。

（小野）　大島先生の最後のご発言、私も賛同するところがございますが、プラトンは「政治というのは本来哲学者がやるのがいい。しかし、哲学者が政治家になれないとするならば、政治家が哲学を学ばねばならない」と、こういうことをもう二千何百年も前にいっておられるわけですね。その言葉を、いまの日本の政治家達はいかに受け止めるか。目先の利害関係の調整をする、ないしは目先で行政官を使って権力をいかに行使するか、こういうことだけで汲々としておりまして、その先に一体どんな日本の国をつくろうか、またどんな人類社会のなかに日本の国を位置づけるのか、こういった部分の議論がほとんど行われていないこの現状に対して、私は大きな疑問を持っている一人でございます。

なお、私自身が、なぜ在野の政治家を選択したかというところに、秋山先生ご指摘になった、代議制民主主義の問題が一つありましてね、この点は、政経塾のメンバーにも先日お話し申し上げました。いまの日本政治に対して、国民の皆さんがどれだけ満足しているのかといえば、少し前のデータで恐縮だけど、多くの人が、日本の政治に満足していないんですよ。私が当時聞いた話ではわずか一・三％しか満足している人がいない。九〇％の国民は、日本の政治に対して不満足であるとはっきりと表明をする。こういう状況のなかで、代議制民主主義というのは果して成り立つものであるか否かという基本問題があるわけです。代議制民主主義ということは、国家

の基本的な運営の権限を自分達が左右することができないから、自分達が選挙で選んだ代表者に委ねて議論した上で決定していただこうと、これが代議制民主主義の基本的な考え方でしょう。

つまり、国民にしてみれば、選挙によって代表を選ぶということは、自分達の命や財産やその他様々な権利、これらが代表者によって決定されたとしたら、それに私達は従いますから、あなた達に代表としての役割を果す仕事をしてくださいと、こういうことをやるのが私は選挙だと思うんですね。それだけの真剣さを本当に国民の皆さんは持って選挙に臨んでいるのか。政治家の説明が足りないという話をされた方がおられたけれども、説明ももちろん大事だけれども、国民の側も、本気で政治に関与したかったら、もっと勉強した上で自分達の意見はこうだと語ってくれるならばそれはけっこうだけど、テレビのコメンテーターがちょっと何か国民の心をくすぐることといったり、それだけをワーッと大声で喋ったら、そのいうことを聞かなきゃ、これはろくな政治家じゃないとこういうふうにいいたがる。こういうような風土をどう変えていくかということが

一つは大事だし、そしてそれに基づいて、政治家自身も、本気の政治をやらなきゃいけないということだと思うんですね。

冒頭、政治って何ですかというご質問がありましたけれども、私は端的にいいますよ。この日本の国の中を調和させ、しかも国際社会とも調和させていくような、その営みを行うのが政治だと思います。日本の国のなかでいうならば、一人ひとりの国民をきちんと調和させる、つまり――国民が、自分のなかを調和させ、国家とも調和させるように導いていくのが政治の仕事だと、こう私は思っておりまして、このあたりに至ると、先程、プラトンのお話をしましたけれど、やっぱり大きな哲学が必要なんですよ。思想的な枠組なしに目の前の利害調整ばっかりやっていたら、もういろんな機械を次々と組み合わせていって、どうしようもない動きしかできない巨大マシーンができるだけなんですね。ですからそのあたりに、本当の日本の国の目指すべき魂のようなもの、こういうものをどうこれから考えていくかということを、政治家のなかで論じ合っていくべき時代がきたのではないかと、こんな気持ちがしております。

（秋山）　白先生、先程、多少マスコミ批判的なことを主張されて、マスメディア自体、第四の権力なんていわれていますよね。政治の側から見て、マスコミというものを、再び同じようなことになるかもしれませんが、どのようにお感じになっていられますか。合わせて、福島先生は、メディアにずいぶんご登場ですけれども、そういうマスコミの権力というようなものをどのようにお考えになっていられるか、お聞かせいただければと思います。

（白）　非常にいいご指摘だと思うんですね。私もテレビコメンテーターを、北朝鮮問題とかなんかでずっとやっていた時に、自分でいうのもなんですが、けっこう受けがよくて引く手あまたに一時なりました。何がポイントかというと、短く明快に話してくれるからなんですよ。これ、非常に単純な論理思考でいくのがテレビだと私は思っているんですね。大体、一五秒以内にまとめるんですよ。だから北朝鮮の関係でいうと、大体、北朝鮮なんかああいう感じでしょう。「白さん、これどうですかね」といったら、最初にいうことは「とんでもないですよ」というんです。（笑声）そのあとに「北朝鮮はですね……」ポチョポチョというとすごくわかりやすいわけ。そういう形でコメントというのをやっていく。

皆さんもたぶんテレビを見て、たぶんおわかりになると思いますが、長々と喋る人の場合に、その人の画を出さないで、なんか別の映像、資料映像を出しながらその人を小っちゃく出したりしませんか。大体、飽きてくるわけです、顔見ているのが。視聴者の女性は、ネクタイ見ているそうです、男性の。男はというと、大体聞いているほう。そういう形があれなんで、メディアというのはそういう――私は別にメディア批判をしているわけではなくて、メディアの皆さんはメディアの皆さんで、あれは視聴率の凄まじい激烈な競争をやっていますから、どうしても極端から極端にいくということ、これが一つの性格なんですね。その性格をわれわれがちゃんと認識をしながらやはりお付き合いをしていくということが実は重要なんではないんだろうかというふうに私は思っているわけです。

そのへんにしましょう。福島先生も、またお話してください。

（福島）　議員がメディア批判をするのは最後になっちゃう

という感じがするので。ただ、私自身思うのは、また原発のことになってすいませんが、やはり何で「三・一一」前、原発の危険性というのがメディアに出なかったか。国会でたくさん質問したけど、それが出なかったというと、やっぱりそれはスポンサーの問題であったり、それからやはり拡声器を使える人達はいるが、やっぱり多くの人はいろんな問題を抱えていても、それを社会問題化したりいろいろできにくいというふうなところもあるので、メディアって、やっぱり拡声器だと思っているんですが、それを使える人、使えない人、長けている人、長けてない人のなかで、この社会のなかにある問題の優先順位が変わったり、本当に重要で議論しなくちゃいけないことが議論されてないというのはあると思っているんです。

ですから、政治とは何かというと、私自身は、もちろん経済成長をどうするかとか日本の景気をよくするとか、非常に総合的なことはとても重要だと思っているんですが、世の中に明らかに政治を必要としている人がいる、それはもう福島の集団避難した仮設住宅で先が見えないという話をする人や、いろんな話を聞きながら、明らかに、やはり、例えば私達はエネルギー政策を転換するために、あるいは自然エネルギーを促進するために、あるいは雇用の現場をどうするためにということや男女平等、あらゆる論点がたくさん政治の課題というのは何万とあるわけですが、明らかに政治を必要として、そこがまっとうに、例えば富の再分配だとかこの社会のなかでどういろんなものを分配したりやっていくか、政治が必要な人がいるということをやっぱり政治はいちばんそれを考えるべきだと思っています。でないと、やはり恵まれている人、お金がある人は自己責任で問題を解決できるが、そうではない人たちに政治が何をできるか私自身は思っていることなんです。

権力ということについて二ついいたいんですが、確かに、議員や政治は権力だと思っています。ポジションに権力がついてくるし、明らかに権力だと。私達議員も、やっぱり権力を持っている。でも、例えば東電のビデオ会議を出せとか、本当にいろんなことを質問したり、さっきちょっと大島さんもおっしゃったけれども、私達も日常的に質問したり交渉

したりするなかで、いろいろ獲得しているものがある。それはやっぱり持っている権力をどううまく使って情報公開させたりとか、そういう役割は実は法律をつくったりとか、すごく大きいということが一点なんです。

私自身も、九ヵ月大臣をやった時に、やっぱり行政のトップとして命じたりいろいろすることで、権力って大きいんですよね。だから権力というものを、人がやはり理解し、多くの人のためにそれが使われているかどうかをチェックするということはとても必要。

二点目は、この間、たまたまノルウェーの労働党の若い、三一歳の女性と会って、国会議員なんですが、やはり、政治は楽しい、政治にコミットすることはやり甲斐がある、政治って面白いというふうに若い政治家が思っていました。ご存じのように、殺人事件がノルウェーでは七七名、島で一〇代が殺されるというのがありましたが、あれはノルウェー労働党が毎年夏、キャンプでやっているところに犯人が襲っていったわけなんですが、やはりいまの日本の社会は政治にコミットすることが面白い、楽しい、やり甲斐がある、手応えがある、こういう質問をするとこういうのがあるんだ、自分達の声が政治に本当は反映しているんだ、国会の周りの反原発の集会であれ、電話一本であれ、実は政治を動かしているんです。その実感、政治ってけっこう面白いじゃない、政治って手応えがあるよ、コミットできるよというのをもっと——今日はだから、大学生に話せてとても嬉しいんですが——小さい時から、自分は主権者であって、それを行使することがとても面白いというかやり甲斐があるという風土というか、そういう機会を是非つくっていきたいと思っています。

（秋山）　もう一つ先生にお伺いにしたいのですが、先生は女性政治家というと怒られるかもしれませんが、しかしそう呼ばざるを得ない我が国の現状を嘆かなければいけないかと思うのですが、いかがですか、女性政治家というものをどのようにお考えでしょうか。会場に目指す若い人もいるかと思うので、実情・現状含めて、何かお話いただけますか。

（福島）　今回、また女性議員が減って、世界で一〇一番目がまた後退するという非常に残念で人口の半分は女性がいるので、もっといろんなタイプのいろんな

バックグラウンドを持った人が、国会だけでなく自治体も含めて、議員になったらいいと思っています。

政治の世界で、男尊女卑だけど実力主義みたいなところもあるというか、私はやっぱり女性が増えたほうがいいと思っていることと、女性が増えることで男性も関心があるが、超党派でドメスティックバイオレンス防止法をつくったりするので、女性が進出することで政治の優先順位を変え得るというふうには思っているんです。それはやはり、もちろん男性で、子育て支援とか一緒にやっている人もいるけれど、いろんなタイプのいろんなバックグラウンドを持っている人が政治に出てくることが、政治の優先順位を変え得ると思っていて、だから私は男性ばっかりではなく、女性が出ていったほうがいいというふうに思っているんです。

（秋　山）　男性のほうから何かありますか。

（大　島）　やっぱり視点が違うんですよ、女性と男性では。だからそういう意味では、エン（縁？）にふれる視点が違う意見を聞く、それで福島先生がおっしゃることは、ああそうだなあとわれわれよく感じることがあって、じゃそういきましょうという話になるので、そういう意味では、バランスを取るためにも、やっぱり偏らない視点という部分では、女性の存在というのは大変大きいと思います。

（　白　）　逆にけっこう過激なことを女性議員さんのほうがいわれているようなところってあるじゃないですか。このあたりって、逆に僕は福島さんに何でだろうとお聞きしたいぐらいなんですよね。

（福　島）　両方当たってて、人間て、やっぱり自分が経験したことから、例えば子育てに苦労すると子育てが重要、医療に苦労すればやっぱり医療を何とかしたいとなるので、バックランドの一つとして、私は女性であるのも一つの個性だと思って、例えば障害のある人がもっと国会に来ればいいと思うし、例えば白眞勲さんのような経歴の人が来るというのも、またぜんぜん違う視点を提供してもらえるのでいいと思っているんです。

でも、女性だからじゃ男女平等に賛成かとか、女性だからじゃ子育て支援か、女性だから社会保障にもっとやれというかというとぜんぜんそうでない例があることももちろん確かで、でも、それって外見は女性だけど、中身は男性的な価値観を持って、

やっぱり政治ってしんどいというか、タフでなければ生きていけない、やさしくなければ生きている資格がない、ハードボイルド、チャンドラーじゃないけれど、タフである必要もあるんだけど、やっぱりやさしとかも必要と思います。

よく女性にあるのは、私も実は女性で恵まれているんだけど、何ていうのかな、女性で何も困ってない、自分は差別なんか受けてない、差別なんてないよとかいうようになっちゃうと困るよね。多くの女性が何で困っているかって、自分はそれは楽しくやってきたかもしれないけど、多くの人達がどんなことで苦労して、パートで苦労してるとか、妊娠して職場にいづらいという事態は理解する必要があると思っています。だから、それはバックランドが、その人にどういう影響を与えるか、またちょっと違いますからね。にもかかわらず、女性が増えたほうがいいし、そのなかでいろんなバックランドの人が来ることはいいと思っているんです。

（秋山）ちょっとしばらく議論してみたいので、順不同でご意見自由に。

（大島）男性はなかなか思っていても言わないことけっこうあるんですけど、女性は、はっきりとおっしゃることが多いので、それからなんか動くこともあるんですね。やっぱり根底をいうと、やっぱり男というのは女性のために獲物を取ってきて女性を守るという感じなんだけど、女性は子どもを守るんですよ。基本的にそういう意味からすると、子孫を守るとか、やっぱりこの国を守るというような、そういう本能というのがあると思うんで、僕は女性というのは基本的に男性よりも優秀で、男性よりもいろんな能力に長けていると思う。それが持続すると思うんです、女性は。

私は、本当、おべんちゃらいうわけじゃないんですけど、女性にはかなわないと思っていて、だから男性というのは、本当にそういう意味では、女性がある程度いて、そういういろんな精神的バランスだとか、そういうことも取れると思うので、やっぱり国会の中にあまり女性が少ないというのもよくないし、ある程度のバランスがあったほうが僕はいいと思う。それは生物学上、自然学的にもいってもそうだというふうな気がする。

（白）まさにおっしゃる通りで、小野先生もおっしゃっ

たように、国民の様々な方々の代表であるわけですから、当然、そういう観点からすると様々な、福島先生おっしゃったようなバックグラウンドのある方々が国会に来て、自由闊達に議論をしていくということは私は必要だと思っていますので、そういう観点からすると、女性をどんどん、もっと来てほしいなというふうに思うんですけど、かといって、じゃ女性を優遇するのはどうなんだというと、優遇といういい方は変なんだけど、女性の議員が出られるような選挙制度にしていきましょうみたいなのというのは、私は変だと思っている部分があるんですね。

ですからそのあたりは、やっぱり自然と国民の皆さんと一緒になって、どういうやり方がいいのか、国民の皆さんが、この人いいねというのをやるのと同時に、政党側もどんどん女性の議員の人達を立候補させるような仕掛けをつくっていく必要があると思います。韓国も男尊女卑だなと思ったら、今度は、大統領が女性になりましたし。

韓国の場合は、やっぱり北朝鮮からミサイルがきた時にも、こういう議論があったんですね。軍のトップが女性でいいのかという意見も、確かに指摘されていたというふうに聞いております。しかし韓国民は女性の大統領を選んだわけだし、やっぱり時代というのは大きく変わっていくし、いずれ日本も女性の総理大臣が生まれる時が、そんなに遠い将来でなくくるのではないかなというふうに思っております。

（福　田）　権力のことで、まさにいまの話は男女の問題というのは、家庭でも起こり得るしカップルでも起こり得る、つまり、ミクロな日常生活の中での権力ということで、全て政治学とか社会学の考え方では、男女も権力関係だし、もしくは先生と生徒も権力関係だし、同士も権力関係だし、政治家と国民も権力関係だしと。

つまり、何かいいたいかと申しますと、何でいまの国家権力のなかに闘争的なものが見えないといいますか、戦（闘）ってないなという、つまり合意形成というものが、ものすごく緩やかなコミュニケーションで合意が形成されていくというようなイメージが政治学や政治家の中にあって、それってやっぱり国民の中で男女は闘争していないし、日本人は。

先生と学生は、学生運動が終わったあとは闘争していませんし、労使も闘争してない。国民が闘争してないのに、国家権力のなかで政治家同士が――僕はミクロな権力とマクロな権力とどこかでつながっていると思っていて、コミュニケーションのプロセスの中で、国民、戦ってないのに政治家だけ戦ってくれよというのは、その初歩的な要素があまりに大きい過ぎるというか、そのあたりのお考えをちょっと国会議員の先生方からお聞きしてみたいなというのが、僕に取っての権力の問題だったんですけど。

（小　野）　福田先生のご指摘、なかなか的を射た大事なポイントを示していただいたと思います。

私は、ちょっと女性論にも関連するわけでございますけれども、女性の国会議員は女性の肩を持つような議論をしなければいけないという前提が、何かあるんですね。何とか党の人ならば、こういう立場で話さなきゃいけないとかいうけれども、じゃ皆さんの支援者達は、本当にその考え方の人達だけがあなたを応援しているんですかと。小選挙区だということは、敵対する人までも含めての代表として選ばれているということを、選ばれた人はどう考えているんですかという基本問題があると思うんですね。

ちょっと福田先生のお話に戻らせていただきますけれども、私は戦いというのは、まず政治家が自分のなかで戦わなくてはいかんのだと思ってるんですよ。だからいろいろな考え方が世の中にはあり、自分の支援者といわれる人達のなかでも、いろんな考え方が渦巻いているというものを、まず自分自身が体を張って、本気でこれが正しいんだということを宣言できるようなところまで考え抜き、悩み抜き、思い抜き、そしてこれを選んだんだという迫力を持った政治家が出てこないと、本当の論争はやることができないと。

いまは、マスコミがワーッと報道して、何となくそういう雰囲気、空気が生まれてきて、その空気に沿って発言さえしておけば、マスコミから叩かれることもないし、世論もおとなしくしてくれるだろうみたいなところに立つものだから、本当の意味の議論が行われない。

それからもう一ついうと、議論するということは、足場がなきゃ議論ができないんですよ。つまり、相撲をやる時の土俵ですね。この土俵をお互いが共有

し合う約束をしてはじめて論争というのができ得るにもかかわらず、その土俵を決めもしないで、お互いが国会の質疑・討論をやっているわけですから、これがまともな議論におそらくなるはずがないのではないだろうかという気がいたしております。

ちょっと感覚的になりましたけれども、問題提起をしておきたいと思います。

（福　島）　福田先生の問題提起に十分応えられるかどうかわからないんですが、確かに権力を持ち、その目的を遂行するために権力をどう使うかということに関して、まだまだ訓練不足だったり、足りないというふうに思っているんです。それをどこで痛感したかというと、政権交代したあと鳩山内閣で私は大臣で、あの時に普天間基地をどうするかあるいは辺野古に基地をつくるかということが重要な問題で、実はあれを五月末までに結論を出すとせず、もう少し四年間あるいは佐藤栄作さんが沖縄返還にものすごく時間をかけたように、タイムスパンを四年とか、極端にいったら一〇年、沖縄の人達も、簡単に辺野古にかわるところがポイとあるいは違う案がポイと出てくるとは思っていないわけだから、それは水面下で、アメリカともネチネチ、ネチネチやるとか、外務省、防衛省と交渉しながら、ものすごく総力戦でやるべきなのだが、それが簡単にできるというふうにしてしまった。

私は、鳩山さんは非常に純粋な人で、友愛で、実は個人的には好きで、たまに、この間も選挙の前ですが、亀井さんと私と鳩山さんで元祖三党合意同窓会でご飯食べたんですが。それはさておき。（笑声）

何がいいたかったかというと、ちょっと正直にいうと、私は沖縄辺野古の問題は、やっぱり外務省、防衛省で、もっとはっきりいうと、日米関係で日米安保でそれまで何十年とメシを食ってきた人々に負けたと思っているんです。だからそれは違う案を出そうと思うんだったら、やっぱりそれはものすごくしたたかにもっとやるべきだったし、私も力不足で、それは反省し、今後どうするかというふうに思っているんです。

同じように、今回、野田さんも、あけすけにいうと、やっぱり財務省にやられたというか、だから権力といった場合、国会の中の権力あるいは政党間の権力争いもあるけれど、私達はそれぞれ何か理想や

こういう社会をつくりたいと思った時に、やっぱり官僚制度をどう使い、本当に国民のためにどう政治を動かすかということが重要なポイントです。自民党政権は、たぶんそこが阿吽の呼吸で、官僚制度と自民党、もちろん喧嘩もしながらだけれども、そこはあるいはもたれ合ったりしながら、ある種の予定調和的な部分があったと。

ポイントは政権交代のあと、本当に権力を振るいながら、官僚制度もコントロールし、メディアもある程度味方につけながらやっていくというところが、まだまだ腕力不足であったり、誰が悪いという話でなく、私達がどういう社会を目指すのかという時の権力の扱い方が、やっぱりあまりに初（うぶ）過ぎたというか、総合力でもっと違うやり方もあったかも。これもさっきの河野さんじゃないけど、経験で、それは本当に申し訳ないんだけど、やっぱり筋も通しながら、またもう一回、どういう形で可能なのかというのは、いまもやろうとしているところなんですね。

（大島）福島先生がおっしゃったんでわかりやすくいいますと、民主党というのは、カップルからちょっと結婚・新婚いくかいかないか。自民党というのは、夫婦なんですよ、もう夫婦。何がいいたいかというと、みんなカップルで付き合っている時はいいとこばっかり見せて、いいことばっかりじゃない。結婚してみて、ちょっと合わなかったらすぐ分かれりゃまだ大丈夫だと、そんな感じです。ところが自民党というのは、ズーッと一緒に長年連れ添ってきた夫婦ですから、少々蹴飛ばしたりＤＶがあっても別れなかったりとか、「もうお父さん、あんなことだけでも、しようがないわね。私がいないとこの人は……」とかいうような、そういうものがある。それは何かというと、自民党というのは長年権力という一つの政権というもののうまみを十分知っているからです。民主党というのは、そういうものがどうなのかも享受しない、夫婦の味がわかる前に離婚しちゃったみたいな、そんな感じなんです。

そこは是非、ちょっと自分を整理してもらいたいと思うんですけど。（笑声）

もう一つ、われわれ民主党が本当にやらなきゃならなかったことは何なのかということをいうならば、やっぱり連れ添っていく夫婦というのは、片目つ

ぶって一緒にやんなきゃダメだというのがあったように、政党が成熟するためには、自分の理想だけでガチャガチャいっていたってダメなんだということを、今回の民主党は学んでいかなければならないと、私はそう思っています。

（白）　福田先生の今のご指摘って、非常に国の一つのあり方かななんて思うところがありまして、それは教師と学生との関係とかって何なんだろうと思うと、やっぱり一方通行なんですよね。おそらく安保闘争ぐらいの時は、何やってんだと教授を攻め立てたというのはあったけど。

僕もこの世界に入って、やっぱりねと思ったのは、シラケというか、最近、シラケという言葉はなくなったみたいなんだけど、いわゆるこの国の安保闘争以来のことがあって、じゃ、何かというとディベート、これがやはり少ないんだなと思うんですね。例えば国会の委員会でもだいぶ質問させていただきました。福島先生ほどじゃないにしてもだいぶやりましたけども。外交防衛委員会での質問というのはけっこうやり合うんですよ。やり合うといっても何がやり合うかというと、こちらが攻めて向こうは守るだけ、政府は。政府から反論するってないんですよ。じゃあんた何考えてんだよといわない。つまり討論になってないんですよ。つまり、委員長が仕切るんですね。それで、ＢＳＥだったかなんかで島村さんという農水大臣がいて、私、ガンガンやった時に、島村さんもけっこうカーッときて、私に向かって逆質問してきたんですね、大臣が。そしたら私の隣にいたいわゆる委員会仕切り役割の理事が、「白、今の答えるな」と言ったんです。こちらは問題にするだけで俺らは質問に答える必要はないんだと。つまり、一方通行なんです。

ですから、やはり党首討論の場合はお互いにそれはやり合いますけど、そうじゃない場合は、国会は、受け身であり反論はしない。

私は今内閣府で副大臣――もうすぐ辞めるわけですけども――やっている。国会答弁、何回か出ました。いちおう前もって役所から、こういう感じで質問がきますから、もうレクチャーが最初にある。ということは逆にいうと、質問をするよということを最初に通告しているわけですから、ですから確かにそれに対して、質問通告て変だよねというんだけど、

やっぱりこれないと議論は進まない部分というのはあるんですね。それはしようがないかなと僕は思っているんだけど、こういう質問についてはこういうお答えがいいんじゃないかと思われますみたいなのが出るわけですね。これだけじゃダメだから、これ、自民党の昔、これやったよ、こういう質問しちゃったほうがいいんじゃないの。いやいや、そんなことやったら、あと大変ですからって、こうなっちゃうわけ。要は、だからそれだけ答えていればいいやということでいえば、ディベートという部分が、政治の世界ではまったくない。それだから何が起きるかというと、野次が飛ぶわけですよ。野次はバンバン飛ぶ。でも、これがまた不思議なもので、自分達は安全地帯にいるわけですよ、野次には応えませんから、いちいち。たまに応える人いるけど、ほとんど応えない。だから野次がバンバン飛んだって、自分達は安全地帯にいて、たぶん好き勝手なことを言っている。それを国民が見てまたシラケる。そういう逆スパイラル現象に陥っているような感じがします。

ですから、国会の委員会での与野党の議論をもっと活性化させるためには、対政府質問ということではなくて、政府からも質問してもいいじゃないかみたいな形にしていけば、もう少し活性化してくるんではないかなというふうに私は感じております。

（秋山）　私の経験では、七〇年代の頃から政治学その他を教えているのですが、当時、やはり学生運動が激しい時には、授業中にかみついてくる学生がずいぶんいました。何いってんだッ、というふうなことでだいぶ議論したことはありますが、いつの頃からか、そういうのはすっかりなくなってしまって、一方通行になってしまった。

私なりに考えますと、第二次大戦後にいろいろ節目があったかと思いますけれども、最近の節目というのは、やはり一九七三年にオイルショックがあって、あれから日本社会はズーッと長期にわたって徐々に変化をしてきて、特に一九九〇年代、よくいう「失われた一〇年」の時代に入って、かなり大きく日本社会そのものが変わってきたように思うんですけれども、いまの議論があまりないというのは、そのへん、先生方、どういうふうにお感じになっていますか、世の中の変化として。

（大島）　私は塾の先生なんです。だから子ども達とずっと

直接接してきましたけど、一人っ子、それからおじいちゃん・おばあちゃんと暮らしている三世代同居というのは、子どもを見たらわかりますからね。何かというと、一人っ子というのは一人ですから、もう大体自分でゲームして遊んだりとかね。多い家族って、例えば四、五人の兄弟がいる子なんていうのは、もう兄弟喧嘩のなかでいろんな人間関係を学んでいるわけです。そうすると自分の主張、食事する時だって、人より一個でも多く食べようみたいなことがあるけど、一人っ子だとそういうことがないから、その生活環境は非常に大きい。それからおじいちゃん・おばあちゃんと暮らしている子というのは、そういう精神的安定感がありますね。子どもが親から怒られた時に、やっぱりおばあちゃんとかフォローしているんですよね。そういう意味での子どもの精神的安定感と。

これはね、私は二十何年塾やっていますけど、すごくよくわかる。そういう意味では一人っ子というのは、自分の意見が全部通るじゃないですか。逆に黙っていても、あとでネチネチ、インターネットでなんかやっている。それでバーンと切れてぶつけるようなことはやっても、議論したりというのはぶつかってそのなかでいろんなことをやるというのは、兄弟が多い子は経験あるけど、そういう経験がないからできてないというところが一つの原因でもあるというふうに思っています。

以上です。

（秋山）何かご意見、おありでしょうか。

（小野）大島先生とは、先程、裏舞台でお話ししていますと、学校に行かずにテニスばっかりやっておられたという話だったんですが、やっぱり、味のある話をされますね。よく本当にわかりやすいお話をいただいたと思います。

この議論がないという――問題ですね。議論をするためには、その人間、双方に自分自身が人生をかけてでもこれを守りたいし、このもとに生きていきたいという背骨が通ってないと、実は本当の議論というのはできないと思うんですね。目の前の事象の一つを捉えて、そこで得するか損するかの議論というのは、自分の人間としての背骨があるかないかとほとんど関係なくできる部分がありますけど、より全体的な議論をしようと思ったら、自分は人間とし

てこういう生き方をする人間である、これこそが正義であると思う、これが善であると思うと、これらの価値観をもって、双方が敬意をもって論じ合う関係が生まれない限り、本当の議論はできないと。これは、私の信念なわけですが、どうも最近の政治家のみならず、日本社会全体の風潮として、自分自身のなかにきちんとした背骨を形成した人間がいなくなっているということではないのかと思います。それが政治の世界にも反映しているのではないか、こういうふうな気持ちがしてならないんですが、先生方、ご意見いかがでございましょうか。

（秋山）　ちょっと一言入れさせていただきますと、かつては保守・革新といった言葉できっぱり割り切れるような、そしてお互いに対立し合うというような明確なものがあったように思うのです。東西冷戦のあとに、そのようなイデオロギー的な対立というのはなくなって、「イデオロギーの終焉」が顕著になりました。なんとなしに、世の中が、将来、よくわからないままに動いていかざるを得ないというような事態が起こってくるようになったと思うのですが、それは、特に一九九〇年代に入って、いわゆる「無党派」というのが急速に増えてきたことにも見て取れます。一九九五年にいわゆる青島・ノック現象というようなものが起こりましたですね。あの頃から無党派という、得体の知れないものがわが社会のなかにどんどん増えてきたように思います。そういうものと政治家の方々、向きあって、選挙民に投票を促す働きかけをしなければいけない、非常にご苦労なことだと思うのですけども。

ちょっと話は飛びますが、無党派についてはどのようにお考えになっておりましょうか。

（白）　私は最近、非常に価値観が多様化してきている部分が日本社会にあるんではないかなと思うんですね。簡単にいえば、私の子どもの頃というのは、天地真理とか、そういうのが大体一人ぐらいだった。それがキャンディーズになって、いまＡＫＢ48になっちゃうわけだよ。ぜんぜんわからなくなっちゃう。だからそれも一つのポイントでして、いままでどちらかというと、みんなが同じ方向を向いているということがないようないま状況に僕はなりつつあるんではないだろうかというふうに思うんです。それはやっぱりいま大島先生もわかりやすい言葉でおっ

しゃったように、様々ないままでの自分の若い人は若い人なりの培ってきた人生とか、そういった経験の中から培われてきた価値観というものが非常に多様化してきている。その多様化してきている価値観を、私達政治家がどのように受け止めているのかというところが、非常に私はいま、アレ？　と思うところがあるんですね。

簡単にいえば、民主党の議員なんだけど、実は自民党に入りたかったけど、自民党に入れなかったら民主党に来ましたという人、けっこういるんですよ。（笑声）いわゆる選挙区に――小野先生、ごめんなさいね――世襲議員が急に入っちゃって弾き飛ばされちゃったと。これ、事実ですから、はっきり申し上げて。だから、結局、民主党だといっても、なんだお前自民党じゃないかと思うのいっぱいいるわけですよ。自民党のほうが仲いいやなんていう人もいるぐらいな。そういう中で、やっぱり共産党さんはちょっとまた別格かもしれませんけど。でも、共産党さんでも、ある議員さんから、エッ？　共産党さんですかという感じの人もけっこういらっしゃるんですよね。（笑声）

だからそういう面では、私は「政党って一体何なんだ」になりつつあるんではないんだろうかと思うんですね。だからわれわれ綱領つくろうったって、またバラバラな民主党がと。じゃ自民党さんはどうだというと自民党さんてうまいシステムだなと思うのは、やっぱり派閥システムというのはうまく作動しながら、やっぱり五〇年間て、すごい培ってきているんですよ、そのあたりを。言い方悪いけど、ごまかしちゃったというところもあるだろうし、でも逆にそれがこの国の政治をこういうふうな形にしたし、日本がここまでよくなったのも、確かに自民党の功績というのは僕はあったと思いますよ。ただ、制度疲労が初めて起きちゃったと。それは何かといえば、ちょっと失礼ないい方だけど、河野洋平先生みたいな方とか太郎さんはそれはすごい方で、世襲が全部悪いとはいわない。しかし、やはりそういうなかで、うちは政治家が家業でございますみたいになっちゃうと、やっぱり痛みを知る政治家がどこまでいるんだろうかという庶民感覚。

僕はさっきの権力と政治家との関係ということでいえば、私達は国民と霞が関の間にいるというふう

に思ってます。私は特に比例区全国区ですから、田舎に行って、それこそお茶飲みながら、お新香食べながら、おばあちゃんとお話をしてお話を聞くと。それを霞が関に持ってきてやっていくと。だから例えば私がやってきたのは企業再生振興、いわゆる中小企業どうするんだというところで貸し渋り・貸し剥がしどうするんだと。そんなことやったら、また、じいちゃん、地方の銀行がこんなことやるよ。担保取ってぼんぼんやっていったらどうするんだということを、やっぱり霞が関の人達は霞が関村（ムラ）でやっていますから、そこをどうわれわれがというところの感覚というのが、非常に私はまさに議員内閣制なんだろうなというふうに思っています。ちょっとなんか雑駁な話をして恐縮ですが。

（大島）　無党派、昔、政治のことに関していろいろ勉強する場というのは、たぶん、政党が開く勉強会とか個人の政治家の政治討論会に行くしかなかったと思うんですけど、いまテレビでやるでしょう、面白おかしく。結局、いうなれば、マスコミがつくった政治家、橋下さんとか東国原さんとか、ああいう政治家が非常に能力があるように思うかしれませんが、それだけでそういうところにいっちゃう人が、僕からいわせれば無党派なんですよ。本当にちゃんと政党がどういうことをやっているかというところを学んでいる人達は、やっぱりそれぞれの党を見ますから、党のなかでの主張を感じるでしょう。ところがバラエティ番組ばっかり見てて、ああなんかたけしさんがいうからとか、橋下さんがいうからとか、東国原さんがいうからなんてふうにしているのが無党派ですよ。だからマスコミがつくりあげているのが無党派ですよ。

基本的に、マスコミは自分達の力でこの国を、やはり動かしたいと思っている人達の昔のレベルは、政治家の本当に国を動かす人達とコミットしながら、その情報をどのタイミングでどういうふうに流すかによって、この国をよくしようとした。ところがいまのマスコミの記者さん達は、自分達がいかにその情報を面白おかしく出して、そしてそれに対する売れ口がどれだけいいかという、そのレベルの視点しか見てないからこういうふうになるんです。いうなれば、ちょうど私のプロフィール、ここにちょっと書かしていただいてありますが、私が書いたわけ

じゃないけど、被災の義援金を狙ってパーティやったみたいな、こういう書き方された。これは現実的には毎年やっているパーティの売上金を、被災地に全部物を買って、そして被災地の人達に来てもらって、いろんな話をしてもらって、九州の人に現状を知ってもらおうということで、一銭も儲けているわけでも何でもないことを、マスコミは「被災の義援金集め」といってやると面白いからというので、それでバーンとやられちゃった。

そういう面白いおかしくものをねじ曲げてやるという人達が多くいるというのは、すごい事実ですから。だからその事実に、多くの国民が惑わされて、結局、政治は面白くないと。で、無党派、無党派をどんどんつくっていこうとするような動きが多いにあるということです。

だって、民主党が一生懸命やって、子育て支援、高校無償化で、はっきりいうと、中途退学する人が半数に減ったんですよ。自殺者三万人、一五年間ズーッと続けてきたのが、今年は三万人切るんですよ。そういういいこともやっているじゃないですか。八ッ場ダムはダメだったけど、一五のダムは廃止して、三六〇〇億出しているんですから。そんなことはマスコミは一切いわないでしょう。そういうふうに国民に対してマスコミが正しい報道をしていないというのが一つ。

最後、一ついいたいのは、私は、車の運転する人とか、バス、電車を運転する人は、呼気検査されるんですよ。みのもんたも呼気検査しろというんですよ。毎朝酔っぱらって銀座から出てきて、ふ～らふら、ふ～らふらしてやっているんですかね、あれ。それであの人達がいうことが全てのようなそういう風潮があるんですから。だからそういうところに是非皆さんは、国民としてそこはしっかりコミットしていただいて、「朝ズバッ！」見なきゃみのさん退場されますから。そういうぐらい、僕らふつふつと湧き上がるものがありますよ。だって僕らがやっていることと違うことばっかり報道するんですから。だから本当、人のせいにしちゃいけないんですけど、私はそういう意味ではマスコミ、特にバラエティ番組で面白おかしく政治を扱うことだけはやめてもらいたい、そういう強い思いを持っています。

以上です。

（吉　野）　違う観点でもよろしいですか。いまの無党派の話ではないんですけれども。

先生方にお伺いしたいことはいっぱいあるんですけども、ちょっと大きな問題で、抽象的かもしれませんが、職業としての政治を考える上で、いちばんこれが重要だよと先生方それぞれに思われているものがあるかと思いますので、それをちょっとお教えいただければありがたいなというふうに思います。つまり、政治家として何がいちばん重要なことなのかというような意味であるというふうに理解していただいて……。

（小　野）　それではちょっと口火を切らしていただきますけど、私はいま日本の政治が混迷するのは、政治家がなすべきことを間違えてしまっているからだと、こう考えております。私は、政治家がなすべき基本的な仕事というのは三つある、とこう考えておりまして、一つは、一般の皆さん方は、日常の生活や仕事に追われていて、なかなか将来のことを総合的に考えるという思いも持つことができなければ、それだけの時間もエネルギーもない。ならば、誰がこの日本の国の将来をきちんと描き出すのかといえば、やはり政治家が描き出すべきであろうと思います。ですから、一般の方ができない、その日本の将来像をきちんと総合的に描き出す仕事をするというのが一つの役割です。

二つ目は、この日本の国に生まれ落ちてここで生活をしている人達を、一人も無視しない、落ちこぼれさせない、これは現実には無理かもしれない。無理かもしれないけれど、その覚悟を持って取り込むのが、私は国家を統合する役割を持つ政治家の仕事だと思います。

これは実は、先程のビジョンを描くというのは、時代の先を走る方面の仕事になります。一方、一人も落ちこぼれさせないというのは、これは社民党さんがよくいわれる話でありますが、どちらかという後ろの側を支える仕事になるんですね、前後というと失礼かもしれないけれども。それで、その両者のなかにほとんどの日本国民が入るんですよ。時代の先を押さえる、それで時代の後方をちゃんと押さえる、両方押さえれば、ほとんどの国民はその間に入る。つまり、サンドイッチのパンでいうならば、両方の食パンが、未来を描くことと落ちこぼれさせな

い覚悟、それで両方で具の部分をちゃんと挟み込んで、全体をグッと動かすという仕事をするのが政治である。

そのためには、国民全体に対しての教育が必要です。先程、価値観多様化の問題が出ましたけれども、いろんな考え方を持っている人達がただそのままにいれば動かないわけですから、政治家がやはり国民に対して教育をしなければいけない。国民に対して信念と覚悟を持って、こうなんじゃないかと語り抜けなければ、私は政治家ではないと思います。

だから、一つは未来のビジョンを明確に総合的に描く。一人も落ちこぼれさせない覚悟を持つ。そして国民全体を教育する。この三つが備わることが政治の三要素であると、こういうふうに私は考えています。

（大島）　政治家の役割、いま小野先生から聞かせていただいて私もすっきりしたんですけど、結局、こちら側（右手）が経済力もあり非常に強い人と。こちら側（左手）がちょっと経済力もなくて非常に弱い人とするじゃないですか。そうすると、自民党政治というのは強いものを強く――橋下さんなんかも強いものを強くといった。でも、はっきりいうと、頑張っても頑張っても、ちょっと苦しい人、たくさんいるわけでしょう。その後ろを押してやるというやさしさが、僕は橋下さんにはないと思います。あの人、すごく自分はつらいところから上がってきた。自分はこうやって上がってきてこうきたと。だから誰でもできるんだと。だからこっち（左）も努力しろと。

それはみんな努力してんだと。百人百様なんだから、悪いけど、僕は子ども達にいうんです。お前、初めて受験する時、自分はこの高校いきたいといっても入れないだろう。これ、現実だと。当然、社会というのはそういう競争のなかで順列が自然とつくわけでしょう。そしたらみんなが、ここ（右）だけが尊いんじゃなくて、ここ（左）で頑張っている人も尊いんだと。貧しくったってしっかりと心の中で幸せを求めている日本は素晴らしいんだというぐらいの価値観をしっかり日本の中に、国民の皆さんの心のなかに芽を植えるようなそういう政治ができたなら、はっきりいうと、みんなそれぞれ幸せになるんですよ。

ところが、自民党がいうように強いものを強く、

橋下さん、強いものは強く、ホリエモンのように六本木ヒルズに住むのがいいことなんだなんて、わけのわからんようなそういう方向に社会をリードをすると、この人達（左）はみんな不幸になっちゃう。ところが、ここ（左）が幸せなんだよといったら、みんな幸せになる。そういった部分の政治家というのは、あらゆる人達の立場の心がわかって、その人達一人ひとりの幸せを願えるような政策をしっかりと実現していくことが政治家のやる仕事で、強いものを強くするようなことをいったら誰でもできるわけです。そういうものに惑わされないように是非してもらいたい。だからそういう意味では、やはり政治が寄り添うのは、こっち（左）ですよ。こっちに寄り添って初めてみんな幸せになっていくんで、だからこれからの政治は、みんなこっち（右）ばっかりですから、みんなよく見ておいてくださいよ。それを今回、国民は選択したということです。だから国民の選択、政治家を選ぶのは国民です。主権在民ですから、全ての責任は一票を投じるわれわれにあるんだということです。政治家を選ぶのはわれわれなんだから。われわれ、同じ一票ですから、皆さんと同じ。われわれは皆さんと同じフィールドの中から一票で選ばれてここにきている、それが代議制ですから、そこのところは是非共有していただきたいと思います。

（秋　山）　小野先生、よろしいでしょうか。先生のお話は、マックス・ウェーバーが『職業の政治』のなかで説いた「政治家の条件」、あれを百も承知で上でのものだと思うのですが。

（小　野）　昔読んだのは読んだのですが……、困難な壁に向かい、情熱を失わず立ち向かうと……。

（秋　山）　ああそうですか。その中で、例えばビジョンを見つけていくために、目測力といいますか、現実を見つめる力が必要だと。合わせて、そもそもやっぱり情熱ですよね。政治そのものがやはり社会づくりだと思うのです。そのために全力で貢献しようといった強い情熱と、それからそういう目測力といいますか、判断力といいますか、的確な。それから責任感をあげているわけですが、実は、この三つを全て成り立たせるということは至難の業だと思うのですね。非常にクールな頭とそして情熱と――情熱というのは心の問題ですから――頭は冷静であって、心は熱

くという、一人の人間にそれを求めるということは非常に難しいことを要求しているのだろうと思います。

それから責任に関しては、すべからく政治の責任は結果責任であるとして、政治家に強くこれを求めた。ウェーバーの書はもともと政治を目指す大学生に対する講演だったと思いますけど、若い人達に是非そういう気持ちを持って将来、政治にあたって欲しいと。こんなふうなことだったと思いますが、先生ご自身、どのようにお考えでしょうか。ウェーバーの提示した条件をどのように評価されましょうか。

（小　野）　秋山先生、まさに私は政治家に求められる三条件が、このなかに含まれていると思います。

私自身の言葉でいうならば、政経塾生にも先般お話しした「夢出せ！　知恵出せ！　元気出せ！」というふうにいってるんですが、これが三条件とほぼイコールで出てくると思います。

「夢出せ」がビジョンでしょう。「知恵出せ」というところはむしろ責任に近くなると思います。「元気出せ」が情熱ということになろうかと思いますから、この三つの条件をきちんと兼ね備えて、しかも日々成長する思いを忘れないで努力し続ける。神ならぬ身ですから、これを全部を結果的に、結果責任だけれども、全てを整えて出し得るか否かといえば、それはどこかが弱かったりすることがあるでしょう。人間というのはそういう存在だと思いますけれどもね。それでもその神ならぬ身でありながら、神を目指して生きようとする、この決意を持った人間こそが本当の指導者だと私は思っております。

（福　島）　マックス・ウェーバーの『職業としての政治』だとか、そしていまいま小野先生、そして大島先生おっしゃったことも、とりわけ大島さんの、むしろどこに力を入れて政治をやるのかというのはその通りだと思っているんです。

ただ、ちょっと私が思っているのは、弁護士になって議員になって日本全国駆け回って、いろんな現場を見て、これを政治で解決しなければならないというのにたくさん出会ってきたと思うんです。それはもちろん、私だけでなくて、ほかの議員さんもそうだと思います。山口県祝島で三〇年以上、原発つくらないと頑張っているおじい・おばあ達、一週

間にいっぺんデモを三〇年間やり続けている、辺野古で座込みを一〇数年やっているおじい・おばあ達あるいはオスプレイ反対といっている人や、あるいはもしかしたら年間三万人を超えて自殺をする人達も、もっといいたいことや別のいろんな仕組があれば死なずにすんだかもしれない。だから、この社会の中で何をやるか、あるいはそういう人達の座込みをやったり何とかしてくれという声が、やはりそれを政治の場面で実現するということを私達は、やっていかなくてはならない。白眞勲さんがおっしゃった通り、でもそれをやはり別に政治献金もしない、寄付もしない、票をたくさんくれるとかそういうのではない。でも思っている人達の声を受け止めて、損得ではなくやっぱり政治がやらなければならないというのは歴然とあるというふうに思っています。

ですから、むしろ、私達というか、政治家というほど偉そうではないですが、鍛えてくれるのは現場であり人々だと。ですから現場や人々から遠ざからずに、私達も人間だから情熱って、行って話して、そうだと思ってそのみんなのエネルギーをもらって、それをバックに国会で頑張るということなので、やはり政治家というのは独立して国会に生息するというのではなく、多くの人々の政治を思う気持ちを、どう私達が体現できるかということこそ、新しい政治というか人々が求めていることだと思うんですね。

でももう一つ、ちょっと話がずれてすいませんが、政治はでもやっぱりものすごく危機だと思っていて、危機であっても結果責任ですから、危機だっていうことそのものも大変なことなんですが、政党政治が日本である意味おかしくなっていると思っているんですね。というのは、ちょっと変ないい方ですが、ヨーロッパの国々だってもちろん山ほど問題はある。しかし例えば、そこは右翼と保守党は絶対混合しないわけですよね。右翼の政党があって保守党があって社会民主主義政党があって共産党があって緑の党がある。その党の名前を聞くと、ソーシャル・デモクラティック・パーティーと聞けば、その党が何を目指しているかわかるんですよ。ところが日本の党は、まあデモクラティック・パーティーとかリベラル・デモクラティック・パーティーは、党が何をやろうとしているかは、経緯からしてわかるけれども、一体、その党がどんな理念のもとに、どんな政治を

やっていくのか、だんだんわからなくなる。

国会は無所属議員の方もいらっしゃって、もちろんそれは大事ですが、やっぱり歴然と政党政治なんですね。政党政治のなかで私達はいろんな戦いをやっているという、ある時はこのテーマではこの党と組むみたいな形でやっていって、ただ、政党政治そのものが、今回の選挙の時にあったように、選挙のために右往左往してどっかいくみたいな、いや、離党することに意味があることもあるし、今回も確かに、なんで「未来」ができたかというと、それは理解はしているんですが――ちょっと話が目茶苦茶になってすいませんが――私が思っているのは、政党政治そのものが、やはり壊れていっているんじゃないか。あるいはもしかしたら、この選挙の結果、自民党と公明党という巨大な部分と維新の会のような、いわゆる改憲勢力が――公明党は違いますが――増えることにおける危機感みたいなのは、いま私自身が思っていることです。

（秋山）　政党のことにちょっと寄り道している時間はないのですけれども、私、常々思っていますのはいまおっしゃったことごもっともですが、その責任は大いに政党そのものにあるのじゃないかということです。それは例えば政党というのはまず何をしなければいけないか。有権者にきちんとした政策を示さなければいけない。政策を示すためには政党自身がシンクタンクの一つでも持ってあたるくらいの情報収集をし、それらを綿密に分析し、世の中の研究をし、そういう地道な努力をまず怠っているということです。

それからやはり組織づくりが重要だと思うのですが、このへんも、特に民主党などの場合ですと、組織づくり、ほとんどされていないのではないかと。

それからもう一つ特に強調したいのは、最近、人材を育てていないということ。政党というのは次の世代、政治を担う人材を育てるという義務があるのだろうと思うのですが、それを選挙の時に、何かパフォーマンスのできる人あるいはテレビに顔をさらしている人とかを、安易に候補者として持ってきて政治家とさせるといったやり方は、結局、政党が自分で自分をダメにしているのじゃないだろうか。もっと地道に自分のところで将来の人材を育てるという、そういう気構えがまったく最近見られなく

なってきているので、これでは政党が潰れていくしかないのかなというふうにちょっと心配をしているのですけれども。

（白）　いま先生がおっしゃったことというのは、非常に厳しい、まさにその通りだなというふうに思います。ただ、言い訳がましい話になりますけれども、われわれ野党から与党になって、野党の時って何だったんだろう。情報を集めるといっても限界があるんですね。つまり、今やっている政治に対してどの程度われわれは情報を集められるか。影の内閣とかなんかというふうにやっていても、なかなかシャドーキャビネットを置いたとしても、与党経験がないから情報を出してくれない。シンクタンクといっても、日本最大のシンクタンクは一体何かといえば官僚組織であって、全てそこでまとめられている部分があってそこに、だからわれわれが与党になって、なんだこれ、こんなことできないじゃないかというのがやっぱり出てきてしまったという部分は、やっぱり反省もしなければいけないし、今後は、一回与党を経験していますので、どうしていくんだというのはまた今後の話だと思います。

　それから組織づくり。これは正直申し上げて、自分達の選挙に汲々とするようになっちゃったんですね、今回なんかは特に。もう組織として成り立たないというか、全てのあれなんですけど、そういう部分においての組織づくりというのはまったくできてなかったということはこれは反省をしなければいけない。

　それと同時に、人材というのももう一つでして、ただ、私もいろいろ調べてみたら、いわゆるタレント議員というのが、ここ数年の選挙では、けっこう落選していますね。前は、有名だったら、けっこう入ったというのがあったんですけど、タレント議員だからといって、じゃ驚くような票が取れるかといえばそうでもないので、日本人なら誰でも知っている方が立候補して、参議院比例区で取れる票は一〇〇万票なんていう数字はぜんぜんなくなっていますので、そういう面でいうと、国民はタレントだからといって、言い方悪いけど、のぼせあがっているという感じではないような感じが、私は今しております。

　それと、先程の「職業としての政治家」でも

ちょっと申し上げたいなあと思うのは、私、政治家って何だということに結局は行き着くんだと思うんですけど、私は、原点は人助けだろうなと思っているんですね。それはやっぱり、いま大島先生も言った「強いものは……」、それは彼らの思考というのは、たぶん強いものはどんどん強くなってもらって、その中で引っ張られていくんではないか、弱い人達がという考え方だと思うし、私達の考え方というのは、そうはいっても、民主党というのはそうじゃないよねというのがわれわれあって、だと思います。

ただこの国って、日本国民の何だろうなと思うと、私は、やっぱり人助け、もっとこれを具体化させていくことってどういうことかというと、仕事を与えるというかな、みんな誰でも仕事ができる――仕事がほしいですよ。働きたいんですね、この国の国民というのは。だから働いて働いて、で、そこで稼いだお金の中からささやかな贅沢を楽しむというのが、私は日本国民の性格があるんではないんだろうかなと思うんですね。

この前テレビ見ていたら、スペインだったかな、一ヵ月の休暇が二週間になってみんな不平をいっているんですね。われわれ二週間だって取れないのに、そういうやっぱり価値観が、この国というのはそういう面では、ものすごいやっぱり皆さん働きたいという気持ちがすごくあるんで、やっぱりそこの部分での仕事をきちっと私達がつくっていく、与えていくというのも政治の仕事だろうし、もっともっと原点は何かといえば、福島先生も、ちらっと軽くふれられた、平和をつくるということだと僕は思っています。これいちばん僕は根本だと思っているんです、政治家の。戦争なんかするんだったら政治家なんか要らないんですよ。将軍様一人いればいいんですよ、どっかのところみたいに。そうじゃなくて、われわれ、ああいういろいろな人達、いろいろな国々があるならば、そういう人達とどう渡り合うか、それでこの国の平和、そして世界の平和のためにどう貢献していくか、どう構築していくか、その知恵を絞っていくのがわれわれ政治家の役割であって、私はそういうスタンスで、情報力とか分析力とか、そういったものをどんどんこれからも高めていくということ。

平和がね、なんか最近、特に勇ましいお話ってすごくあって、やっつけろとか、なんか特にやっちまえとかなんとか、軍事力とか、なんか核だなんていう話まで出てきちゃって。戦争したらＴＰＰも消費税も何もないんですよ。全部なくなっちゃいますよね。それをやっぱり基本で僕は持っていますので、その部分をわれわれはベースとして持って、それからどうするんだということを知恵出していく必要があるんではないかなというふうに思っております。

（秋山）　ありがとうございます。

アッという間に時間が過ぎてきました。せっかくですので、会場の若い方のほうからいくつかご質問あれば、それにお答えいただきたいと思います。

（質問）　これは民主党の白議員かもしくは大島議員にお聞きしたいんですけど、白議員もご自身で、与党にならなかった情報が出てこなかったと。野党になって初めてわかったことがたくさんあったとおっしゃいましたけど、与党になって、野党にわからなかったことが。でも、自民党の議員の前職を見ると世襲の方がいちばん多いんですけれど、民主党って、官僚がいちばん多いんですよ、前職で。官僚出身者がいちばん多いんですよ。特に大蔵がいちばん多いんですよ。それこそ古川さんにしたって、いろいろいますよ。そういうのは何でわからないんですか。

（大島）　完璧に（簡潔に？）私がお答えします。

民主党で官僚を辞めて政治の世界に来る人は、選挙を経て地域や国民の代表として、政治の立場から情報を得ようとする。一方で官僚の世界で地位を昇ってきた人は、法や規則、ルールに則って官僚の立場でそうする。そこの対立というのは、たいへん大きい。だから、それぞれの立場、立ち位置からみた主張だけでは、情報はとれない。

だからそういう意味での、そういった官僚だから取れるかというと、そうじゃない。全て人間関係だから。

（白）　官僚だから取れるということじゃないですよ、はっきりいえば。官僚同士で、同じ役所の人間でもわからないですよ。同じ省にいてもわからないです。だから、それは縦割りです。われわれ横串（よこぐし）入れようじゃないかと言っているんですけれども。だから官僚がいっぱいいるからお前ら何でわかんねえんだ、そういう問題じゃない。やっぱり官僚

だからといっても、彼ら自身もわかってない。ということなんですね。ありがとうございます。

（質　問）　きょうは、大変貴重なお話、ありがとうございました。

僕は日本大学法学部の政経塾のものなんですけれども、大学生で学んでいく上で、政治の諸理念てどういうものかというのをこれから、あと二年間なんですけども、探究していこうかなと思っております。そのなかで、小野先生には一二月五日にお聞きしたんですが、大島先生、白先生、福島先生の精神的支柱になる人物と本を、できれば教えてもらいたいなと思うんですけれども、よろしくお願いします。

（大　島）　簡潔にいいます。新しい法華経の解釈。法華経の経典をもとに僕は政治をやっています。

（小　野）　公明党の……（笑声）

（大　島）　違います。

（　白　）　私は先程お話しました通りです。どこかの本を見てということではなくて、私自身政治家になりたいというふうに思った、子どもの頃から、あるいは学生の時も思っていた――私、国籍が違っていたからね。もともと選挙権もないわけです。そういうの、ぜんぜん想像もしてなかったんです。ですからそういう中で、やっぱり政治が動かなければなというタイミングでお話があったというなかから政治家を志したわけでして。そういう観点から、私はこの国の国益というのは周辺諸国と仲良くすることじゃなければこの国の国益はあり得ないという観点から政治を志しております。

ですから何かの本をとか何かの人物をということではないというふうに認識していただければと思います。

ありがとうございました。

（福　島）　私は南アフリカ共和国に二度行くことがあったんですが、ネルソン・マンデラさんやそういう人達をとても尊敬しているんですね。なぜかというと、彼は二七年間、獄中にあったけれども、彼自身も、人間性も損なわれなければ理念を失うことも情熱を失うこともなく、そのあと黒人政府をつくるわけですよ。当時、南アは核兵器を持っていて死刑があったけれども、それも廃止して廃絶をしていく。だからわりと不撓不屈の精神みたいな人のこと、だからすごく迫害にあったりすごく嫌な思いをしたり、困難

にありながらでも、やっぱり情熱を持ち続けるような人には、とても尊敬をしているというふうには思っています。

個人的なバックグラウンドでいえば、私はやっぱり村山パパと土井ママとか、いろいろな人に育ててもらって、それはすごく育ててもらったというふうに思っています。

（白　）　あともう一点。それに関連していうと、私はある自民党の大物代議士といわれる方と、議員になってからお会いさせていただいて、ああ、これがザ・政治家だなと思ったんですよ。本当、何人かの自民党の大物の政治家と会うと、やっぱり信念あるなあとか、傍から言われているイメージと、会ってみて違うんだよね。民主党にいないんです。そういうのが残念ながら。（笑声）俺ね、思った。本当に自分は民主党なんだけど、自民党の議員さんの大物のそういう素晴らしい方というのは、やっぱり党派を超えて僕は尊敬できるなと思う方がやっぱりいらっしゃいますね。

（小　野）　それは素晴らしい発言だ。

（秋　山）　最後にちょっと司会の権限で条件をつけてお話いただきたきと思いますけれども、今日いくつか問題を残したかと思うのですね。いま日本が置かれているような閉塞状況、対立、きちんとした議論が起きないとか、未だ女性の進出が政界においてもままならないとか、いろいろ課題が出たかと思いますが、皆様議員さん、政治家ですのでこの閉塞した日本の状況をどう突破していくのか、そのへんのお考え、意気込みを含めてお一人、二分でお願いできればと思います。

（大　島）　とにかく皆さん一人ひとりの思いを大事にして、しっかりやるということに尽きます。それで皆さんにお願いしたいのは、私の大学の後輩でもありますから、是非、政治に興味ある人は、私のフェイスブック友達に来てもらって、それでうちの国会に来て、いろいろ一緒に勉強しましょう。しっかり頑張って、やっぱり僕は同窓のご縁ですから、皆さんが、もし政治のなかで本当に頑張りたいという思いを持っていらっしゃる方がいらっしゃれば、一人でもしっかり私はそういう人達は正しく育ってもらいたいと思うし、伸びてもらいたいと思います、塾の先生ですから。

政界というのは人の芽を摘むことばっかり考える人がすごく多くて、私はそこにいやいや嫌気がさしているので、私はそうなりたくない。たぶん小野先生もそれでいま在野で人を育てようとされていると思うので、だからそういう意味で、そういう志の人は私を訪ねて来てください。

以上です。きょうはありがとうございました。

（小　野）　私は、率直にいいますが、永田町の政治家以上の仕事をしようと思って、いま在野で活動しているところです。その根底の思いは何かというと、永田町はあまりにもいろいろなものに縛られ過ぎております。せっかく皆さんに今日この雑誌をお届けしておりますのは、在野の政治家といってもわかっていただけないだろうから、こんなことをやってるんだよという自己紹介方々配っていただいたんですけど、せっかくですから御覧下さい。この中の二～三ページのところに「私たちはなぜ、段々と窮屈になっていくのか」という一文を書かせていただきました。

そのいちばん右のところ、皆さんも自由を尊重しながら生きていきたいと願っている方々が多いと思いますけれども、自由というのは何だと。私は、このように書いてみました。「自由というものは、結局のところ一人ひとりが、不確かなものを不確かなものとしてそのままに受け止めて、それにもかかわらず秩序が守られていくように、自らの責任を背負っていくというところから生まれてくるものではないでしょうか。つまり自由に生きるということは、自らが不確かさのなかを自分の強い覚悟で強く生きていくのだという決意を持たないことには生み出されてこないものだと思うのです。

つまり、第一には、社会と自分自身の関係に関するきちんとした見識を持つこと、第二には、自分自身の責任を自覚をすること、第三には右顧左眄せず、自分の生き方を貫くこと、この三点が必要だと考えています。」こう書かせていただきました。

この困難な状況を突破するためには、人間力を持った政治家を皆さんが選び出し、そして育てることです。そして皆さん方は、そのために国民として人間力の高い国民になることだと、こういうふうに私は考えておりますので、また、励んで頑張ってやってください。

（秋　山）　ちょっと一言だけ。私の言葉足らずで失礼しまし

たが、小野先生は、実は衆議院議員を五期も務められた、松下政経塾第一期生で、いまの総理大臣と同期と。逢沢さん、今度、入閣されるんですか。

（小　野）　それはわからないですね。

（秋　山）　というバリバリの経歴をお持ちですし、国会議員には自らの意思でお出にはならなかったけども、政治家としての気持ちは未だに並々ならぬものを秘めておられる、こういう方なので、ちょっと補足させていただきます。

（小　野）　どうもありがとうございます。

（　白　）　小野先生が素晴らしい話をしたあとは喋りにくいんだけども、でも、ご指名でお話させていただくと。

最初に、私は福島みずほ先生から、最近の選挙はゴロンゴロンと自民・民主と、郵政選挙からいえばね、猛烈な数の失業者が発生しているんですよ。そういう中で何が起きているかというと、いままでちょっと僕言わなかったんだけど、いわゆるリスクを取る政治家というのかな、ものすごい政治家のなかでリスクが高くなってきていると僕は思っています。そうすると何が起きるかというと、さっき申し上げたように、世襲議員の方々とかあるいは議員になりたいなと思っても、奥さんにとめられちゃう、あんた、どうするのよ。三年半後には、また大丈夫なのといわれた時に、ウッと思ってしまうというのもあるだろうし。だから変ない方だけど、つぶしがきく職業の人、すごく多くなっています、いま。福島先生は、その前だからね。つぶしがきくとかなんかという前から議員になっていらっしゃるからあれなんだけど、いまの若い人達のなかというのは、いわゆる何か資格を持っていて、議員を辞めてもまたその資格で食っていけるよねという人がすごく増えてきているなというふうに思っているんですね。リスクを取る、これどういうふうにしたらいいんだろう。だって僕らはさ、これで落選したら、会社、雇ってくれませんよ、国会議員なんていう方。めんどうくさい、口数多そうだしさ。だからやっぱり、わかっているんですよ、そのあたり。

ただ、僕も思うのね。僕も新聞社辞めて、こっち来ましたよ。はっきりいうけど、新聞社のほうが給料はいいわけ。こっち、いまなんかネットでギャンギャン言われるわ、悪口は言われるわ、朝鮮人のスパイだとか、おかしいんじゃない。だって俺、韓国

人ですって書いてあるのに、もともと。スパイだなんていうことがおかしいじゃない。そういう悪口、罵詈雑言の嵐になっている。

そういうなかで何なんだというと、やっぱりそれでも信念持つということなんですよ、いま小野さん言ったように。やっぱりこの国、変えていこうじゃないか、世界変えていこうじゃないか、平和にしていこうじゃないかと。そういう思いを、やっぱり皆さん若い人達持っていただいて、あとは何とかなるよという、若いエネルギーって僕はそこだと思っているんですよ。何とかなるよ、だからその部分でやっていこうじゃないかと。それよりも一生、そんな長くないんだよね。俺、もう五〇年ちょっと生きてきたけど、考えてみればアッという間でしたよ。だから、一生一回しかないんだったら、もっと気合を入れていこうねというか、そんな安全パイだけではないところで気合入れる価値があるところだと。政治はダイナミックです。政治家になって思ったのはこのダイナミックさのなかに自分が入れる喜びというのはあります。

以上です。

（福　島）　白眞勲さんの続きでいうと、政治は確かに苦労することもある、予想外のこともあるし、何でこんなことといわれるんだろうというのはあるんですよね。ドイツ社民党のラフォンテーヌさんが、政治家というのは職業上の殴られ家だというのを一九九〇年代読んで、でもそれは覚悟してなったので、それも栄養のうちというか、それも一つの必要経費ぐらいと思ってるので、あらゆることも受けて立とうじゃないのというのは、実は思っているんですが、ただ、今日は皆さんがおっしゃったように、政治のダイナミズムや、それから政治を必要としている人もいるし、政治のなかでものすごく動いていくことややり甲斐というのはものすごくあるんですね。だから一日一日がハッピー、ノーテンキには生きていけないけれども、でもやっぱりものすごくやり甲斐を感じる瞬間というのはたくさんいろんな形であって、是非、こういう形で政治そのものに関心を持ってくれる若い人がいることをとても嬉しく思っています。

さっき大島さんもいいましたが、私の事務所にでも、政治ってやっぱり百聞は一見に如かず、予算委員会を傍聴するとか、ちょっと議員会館に来て何か

やってみるとか、それだけでもずいぶん政治がグッと身近になると思うので、是非是非遠慮なく国会の委員会を見たいとか、国会で一日だけでもボランティアしたいとか、ちょっとこんなことしたいというのでも遠慮なくいってください。

例えばうちの事務所なんかに来る若者は、三度のメシより権力が好きというより、やっぱり平和が大事で、そしてやっぱり心がやさしく、なんかやっぱり社会民主主義的な、もっとみんなが共生できる社会をつくりたいという人や、性的マイノリティの人だったり、ハンデモキャップのことに関心があったり、福祉をやりたいとか、男女平等的であったり、やさしい人が多いんですね。そういう人達を見事に国会に送り込むだけの力を全部持ってないというのが、ちょっと自分自身でもすごく残念だとは思っていますが、政治スクールなどもいままでもやってきたり、できたら若者のための政治スクールをつくって、そのなかから自治体議員とかは生まれているんですが、是非そういうこともやっていきたいと思っています。今日はたまたま国政でしたが、私はやっぱり自治体議員とか首長さんなどもものすごくやり甲斐がある仕事だろうというふうにも思っているので、今日はこういう形での出会いですが、また今後もいろんなお付き合いをさせてください。また、遠慮なく事務所にも来てください。

今日はどうもありがとうございました。

（白　）　福島さんの事務所のトイレを隔てたこちら側には私の事務所がありますから、ついでにお寄りください。（笑声）

（秋　山）　どうも先生方、熱心な討論、本当にありがとうございました。

予定の二時間半がきましたので、これで終わりにしたいと思います。まだまだ私ども用意していたお聞きしたいことが山ほどありますので、また、是非こういう機会を持てればと思っております。

皆さん、個性的な方が多くて、ちょっと交通整理に不手際がありましたことをお詫び申し上げたいと思います。

本日は本当にどうもわれわれのためにありがとうございました。（拍手）